

# 日本在来馬、対馬から全国へ 南の小型馬も中型馬と同じルート

会員記事

2020年11月5日 5時00分



対州馬による競馬＝長崎県対馬市



で至ったとみられるという。

競走馬理化学研の戸崎晃明上席調査役は「今いる在来馬は恐らく、朝鮮半島から対馬を経由して本州に輸入され、古代王権によって全国に広がった」と推測した。論文は専門誌「アニマル・ジェネティクス」に掲載された。(上林格)

日本の在来馬は、どこから、どのルートで渡ってきたのか。競走馬理化学研究所(宇都宮市)と米ネブラスカ大などのチームが在来馬8品種と世界の32品種のDNAを比較し、日本在来馬は、モンゴル在来馬の祖先が対馬を経由して輸入され、全国に広がったとみられることがわかった。沖縄県の与那国馬や宮古馬は中国南部から来たとの説があったが、九州を経由して南下していたという。

現在、日本に残っている在来馬は、北海道の道産子から沖縄県の与那国馬まで8品種。このうち、南西諸島のトカラ馬と宮古馬、与那国馬は体高が110センチほどと小さく、本州の中型馬とは別ルートで日本に来たのではないかとする説があった。京都大の野澤謙名誉教授らが1998年、血液型たんぱく質の分析から、「中型馬と小型馬は遺伝的に区別できない」と、同じ系統だと明らかにしたが、今回はDNAの6万5千力所を比較する手法で精度を上げたという。

その結果、日本の在来馬8品種の祖先は、中国北部からモンゴルにいるモンゴル在来馬の祖先と同じ集団だった。国内に持ち込まれたあと、長崎県対馬市の対州馬と愛媛県の野間馬のグループがまず分岐した。ここから長野県の木曽馬や北海道へと北上するグループと、宮崎県の御崎馬や鹿児島県のトカラ馬など南下するグループに分かれ、南下した馬は南西諸島を経由して沖縄県の与那国馬まで至ったとみられるという。